

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan *Nippon Chugoku Gakkai*

二〇一二年(平成二十四年)四月三〇日
第一號(通卷第二十一號)



編集◎京都大学文学研究科 平田昌司
〒600-8501 京都市左京区吉田本町
メールアドレス: chubun.kyoto@gmail.com
発行◎日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
ファックス: 03-3251-4853
メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

目録

- 〇二 エストニアの旅
川合 康三
- 〇四 英語圏のシノロジー
高津 孝
- 〇六 越境する「中国語圏文学」:
東亞現代中文文学国際学術研討会(韓国ソウル)参加報告記
小川 利康
- 〇八 国内学会消息(平成23年)
- 十八 委員会報告
- 十九 事務局より
- 二〇 第64回大会開催のお知らせと研究発表募集

エストニアの旅

川合 康三
理事長

この欄に寄せた拙文、一回目も二回目も重く暗い内容になってしまいました。今回は春の到来にふさわしく、明るく軽やかなものを目指しましょう。

*

アメリカの気鋭の日本学者、ジェーソン・ウェップさん(オレゴン大学)とマシュー・フレリーさん(ブランドアイズ大学)が相談したいことがあると、わざわざ家まで来られたのは一昨年秋のことです。お二人とは十数年来の友人で、何でも率直に話し合える間柄。相談というのは2011年の夏にエストニアの首都タリンで開かれるEAJSの学会と一緒にいかないかという誘いでした。European Association For Japanese Studiesは三年に一度、ヨーロッパのどこかの都市で開かれる日本学の学会とのことです。どこの町で開くか、毎回工夫がこらされ、行ってはみたいけれどなかなか機会がない、そんな町を選ぶことで人気があるようで、第十三回にあたる今回はバルト三国の一つエストニア、その首都で古い街並みが世界遺産に登録されたタリンが開催地。しばらく海外の学会から遠ざかっていましたが、エストニアと聞いたとたん、むずむずと旅の虫が動き出しました。めっ

たに行ける所ではありません。

学会発表は一つのテーマのもとに4人でチームを作って申し込む。ジェーソンさんは日本上代文学、マシューさんは幕末明治の漢文学、そしてわたしは中国古典文学、その三者に共通する「日本学」のテーマを見付けなければなりません。我々は「隠逸」をテーマとすることにしました。もうお一人、ケンブリッジ大学のリチャード・ポウリング教授には、三人の発表に対するコメントをお願いすることで、チームの概要が決まりました。わたしの場合は急遽、日本学研究者になりすますために、にわか仕込みの勉強をせねばなりません、タリンに行けるとあれば厚かましいのもやむをえません。夏目漱石『草枕』を取り上げて、中国の隠逸と日本の隠逸を比べてみることにしました。

何十年ぶりに『草枕』を読み直してみると、漠然と記憶のなかにあったのと違って、かなり複雑な小説であることに気付きました。小説の最後に至って、ヒロインの那美さんは別れた夫が尾羽うち枯らして満州へ流れていく姿をたまたま^{ステーション}停車場で見かけ、その時初めて彼女の表情に「憐れ」が浮かぶ、それを見た主人公の^{えかき}画工は今までどうしても画けなかった那美さんがやっと画けると喜ぶ、そこで突然小説は終わります。「非人情」の世界を追求したはずなのに、最後は「人情」に回帰するのです。これは小説としては破綻ではないか。しかし「人情」だけなぞったら凡俗の小説に墮してしまうし、「非人情」に徹しては小説にならない。那美さんが「人情」に帰着することでかろうじて小説たりうる、微妙なバランスのうえに成り立っているかに思いました。

また那美さんの顔に浮かんだ「憐れ」は、ふつう憐れみ、憐憫と解されているようで、国文学者の論文のなかにはそれを「神の愛」と読み解くものもありました。しかし上から下に向かって憐れみを垂れたのではなく、ここでの「憐れ」は中国で言うところの「憐」、つまり対象との間に強い心の結びつきを覚える語として解した方が、小説の奥行きが深まると考えました。ずっと自分の心を閉ざして奇矯なふるまいを続けていた那美さんは小説の最後に至って初めて、もとの夫との間に対等の人間としての感情が生まれた、それゆえにやっと「絵に画ける」、つまり小説として成立しうるのだと。

さて、そんな泥縄論文をたずさえてヘルシンキで降り、町の中心部からすぐ近くの波止場でエストニア行き的高速艇に乗ると、1時間半でもうタリンです。乗船券を買う際に窓口でパスポートを提示するだけで、エストニアには入国審査というものもありません。ユーロがそのまま使えるのも便利です。

船はバルト海に点々と浮かぶ小島を縫うように進みます。フィンランドの大地が視界から消えるほどなく、対岸にエストニアが見えてきます。港からタリンの中心部へもすぐ近くです。ホテルにはすでにアメリカから着いていたウェッブさんとマシューさんが待っていました。

その晩、9時頃まで明るいタリンの町を三人で歩きました。街並みはとても清潔で健康的に見えました。耳に入ってくる言葉には時折りロシア語も混じていましたが、1991年にソ連から独立したエストニアの人々の解放感が町を明るくしているかのようです。旧市街として保存してある地区以外は、近代的なビルが建ち並び、活況を呈しているかに見えるのはIT産業が好調だからだそうです。

タリン大学を会場として開かれた学会では、思いがけず国文学研究資料館の今西祐一郎館長と出会いました。今西先生は頻繁に海外に足を運んでおられるそうですが、わたしにとってはまれな渡欧、見知らぬ町で旧知の方に遭遇するのは嬉しいものです。古典文学のデータベース化とその利用方法を海外に精力的に紹介している、その一環としての参加とのことでした。

700人の参加者が、日本語、文学、歴史、芸術から政治、経済、そして日本語教育に至るまで、10を越える部会に分かれ、発表・討論が連日続きます。一つのチームの持ち時間は90分、使用言語は英語もしくは日本語。わたしはもちろん得意の日本語でしゃべりましたが、参加者のなかには海外で日本文化を学んだ、また海外を拠点として研究活動をしている、したがって英語に堪能な方が多いかに見受けられました。英語を主たる言語とする研究者が中心であること、そしてまた日本に関するものなら何でもありという広範さ、そういうところが日本の学会とは違った性格を与えているようです。日本における各分野の研究状況とはどのような関係にあるのだろうか、ディシプリンや方法の違いは研究の内容にも差異を

生じていないだろうか、もしも日本と別の次元で日本研究が営まれているとしたら奇妙なことではないか……

顧みれば、日本中国学会も分野は思想・文学に限定されるとはいえ、日本語を主たる言語とする研究者による、中国という「外国」を対象とする学会、そのあたりはEJJSと似たところがあるわけです。今までのところ、排他的とまでは言わないにしても、日本は日本でといった、中国とは直接関わらないかたちで行われてきました。中国や台湾との間で、表敬訪問を越えた実質的な交流について考えるべき時期が来ているのかも知れません。

わたしたちのセッションでは、ウェッブさんが大伴旅人と陶淵明の飲酒詩の比較、マシューさんがともに幕末明治を生きながら対照著しい矢口謙斎と成島柳北の考察、いずれも緻密で高度な内容の発表をされました。それに対するポウリング教授のコメントも、会場からの意見も、日本で行われたとしても何ら違和感のないものと素人ながら受け止めました。わたしが『草枕』を取り上げると知って、『草枕』を初めてヘブライ語に訳した女性化学者、ヨナ・シデラル博士もイスラエルからわざわざ来てくださいました。

この旅は勤務先には休暇をとっての自費の渡航、ならば学会にずっと縛られなくてもよいだろうと都合のいい判断をして、自分の発表を終えるともっぱら観光にいそしみました。タリンには城壁に囲まれた中世の旧市街がそのままのこされています。13世紀の初めに建てられた教会、14世紀の市庁舎、石畳の入り組んだ起伏の多い街角をさまよっていると、途方もなく長い人々の営みにじかに触れる思いがします。

一日、タリンから200キロ近く離れたタルトゥという町へ一人で出かけてみました。2時間半走り続けるバスの料金はわずか10ユーロ。便数も多くて、バスステーションに行けばいつでも乗れるという便利さです。その道中の景色も楽しみにしていたのですが、所々に牧草地があるほかは荒地のまま。あまりの単調さにすぐ飽きてしまいました。冬は凍てついた大地が変わることでしょう。タルトゥも11世紀以来の古い町で、白亜のタルトゥ大学は400年の歴史をもつそうです。大聖堂の屋上から眺めた小さな町は、短い夏の終わりの光を浴びて白く輝いていました。

英語圏のシノロジ

高津 孝
鹿兒島大学

図らずも、『中国学(シノロジー)のパスpekティブ』(勉誠出版、1~435pp)という欧米研究者の論考を集めた本を一昨年出版することになった。全て英文からの翻訳であるが、私自身の専門は中国古典文学であり、研究上、特に英語を必要とするものでもなく、英語圏に留学した経験もない。このような本を出版することになったのは全くの偶然が重なった結果である。話は2001年に遡る。その年の5月18日に東京で開催される国際東方学者会議シンポジウム(東方学会)で、宋代史研究会の知人を中心としてパネルが組まれ、私もそこで宋代文学に関連した内容を発表することになっていた。同じパネルでニューヨーク州立大学ビンガムトン校のジョン・チェイフィー先生も発表することになっており、五月の連休前にチェイフィー先生の英文原稿が電子メールで日本に届き、誰か翻訳してくれませんかという知らせがパネル参加者全員にメールで流れた。誰も手を挙げる様子がないので、たまたま手が空いていた私が連休を利用して翻訳を試みることになった。チェイフィー先生は、宋代科挙の研究が有名で、著書は中国語にも訳されており、宋代を

フィールドとするものにとってはよく知られた研究者である。平易な英語で翻訳はやりやすいものであった。翻訳を完了して送付すると、チェイフィー先生は国際東方学者会議関西支部会(京都)でも講演するので、そちらの原稿も翻訳してほしいとの依頼が入った。当初の論考に比べて量も多く躊躇したが、宋代の皇帝一族を扱うという内容に興味を引かれ訳すことにした。思いの外、面白い内容で翻訳はあっという間に終わった。この論考では、宋代の文学作品にも度々顔を出す宋代皇族の全体像と社会的存在の意義が簡潔にまとめられ、北宋初期の宗族(Imperial Clan)成立から、南宋末、厓山の戦いに敗れて消滅するまでの経過が手際よく叙述されている。読み終わってある種、感慨の生じるような論文であった。これは、チェイフィー先生が1999年に出版した*The Branches of Heaven: A History of the Sung Imperial Clan* (Cambridge: Harvard University Press, 1999)という宋代皇族を総合的に研究した著書のエッセンスをまとめたもので、内容の奥行きと厚みは専門研究の存在という背景に起因するものであった。それ以降、欧米の研究者がシンポジウムに招かれ日本を訪問する場合にはしばしば英文原稿の日本語訳を頼まれるようになった。決して翻訳が得意というわけではないが、時間的に余裕のある限り努めて引き受けているうちに結果として多くの英文原稿を訳すことになった。一定の計画に基づいて翻訳した訳ではないため、結果として訳書には様々な傾向の論考が並ぶことになった。

翻訳は自分がよく知っている分野については、何が書かれているかある程度予想がつくので比較的容易である。宋代史研究者からの翻訳依頼であるため、自分の専門とする宋代に関連するものが多く、手元に参照すべき資料も揃っていることもあり、対応は可能であった。ところが、自分の専門から幾分離れた内容のものや、あるいは全く未知の分野の論考についての翻訳はかなり難しい。たとえば、中国書誌学の専門家であるルシール・チア先生の「中国の出版・書物文化における大変貌」という論文は、フィリピンを中心として東南アジアに及ぶ華人社会を背景に、中国の書物がどれだけ海外に伝播したかを探究した論文で、フィリピンの歴史、東南アジア華僑、華人の歴史、スペイン語、スペイン文学についての知識が要求され、翻訳

と平行して、基本的事実についてかなり勉強する必要があった。基礎的知識が無いと翻訳は難しく、翻訳を契機にして強制的に学習させられるケースも多い。チア先生の論文はたいへん面白い内容であったこともあり、自分にとってこの翻訳は有意義な時間であった。実際、専門分野が固定化すると、なかなか他の分野へと読書範囲を広げることは難しくなってくる。この翻訳は、強制的に学際的読書に誘ってくれる良い機会になったといえる。

また、現代思想に興味があり、普段から少しずつ読書の対象としてきたが、それが翻訳に役立ったのが、トマス・リー先生のものを訳す時であった。リー先生は中国教育史の著名な研究者であるが、永くニューヨーク市立大学で教鞭を執られていたことから、欧米の現代思想の動向に敏感で、本書に取められた論考にもそうした傾向が見られる。リー先生の論考は個別の事象を研究したものではなく、今後、中国を対象とした研究が進むべき方向を示した内容になっている。内容は現代思想の動向を踏まえており、自分の読書傾向と共通する点があって、興味深く訳すことができた。その後、リー先生には何度もお会いする機会があったが、台湾の出身で、エール大学で博士号を取られ、香港中文大学、ニューヨーク市立大学で教鞭を執られたリー先生は、その存在自体が歴史性を帯びている。台湾出身の年配の方に見られるようにきれいな日本語を話されるが、その自然な発音に我々は植民地支配という歴史の痕跡をどうしても感じとってしまうのである。

リー先生は翻訳にかなり慎重で、訳文を送ると、ニューヨーク市立大学の日本語が出来る同僚にチェックを依頼したようで、何点かの訂正要求があった。原文に忠実な機械的翻訳を要求されたところもあり、また、こちらの明らかな間違いを指摘している点もあった。明らかな間違いは「few」の翻訳で、この単語にはマイナスの意味とプラスの意味があり、どちらの意味かは事実をどう読み取ったかに関わってくる。この間違いは訳者の調査が不十分で、背景事実についての知見が不足していたことに起因するものであった。これ以降、翻訳に際しては極めて慎重になり、背後の事実の確認に可能な限りの努力を払うようになった。リー先生のおかげである。

情報通信の発展は、海外の研究者との交流のあり方を

全く変えてしまった。いまから考えると無謀に近いものではあるが、見ず知らずの研究者からの一本のメールで、米国の学会に出席したことがある。当時、テネシー大学におられたヒルデ・デ・ヴィールドト先生から、突然、2004年3月に米国サンディエゴで開催されるAAS(The Association for Asian Studies) Annual Meetingで、科挙研究のパネルを構成するので、参加して欲しいとのメールが送られてきた。中国などで中国語による発表はしたことがあったが、英語での発表は初めての経験であり不安はあったが思い切って参加することにした。後で知ることになったが、広島大学の市来津由彦先生のご紹介があったようである。デ・ヴィールドト先生は、ベルギーの出身で、ハーバード大学で博士号を取得し、テネシー大学で教鞭を執った後、現在はイギリスのオックスフォード大学に所属されている。オランダ語が母語で、英語はもちろん中国語も流暢に話される。才能ある研究者で宋代を中心に精力的に論文を発表している。デ・ヴィールドト先生が来日し発表されるときには、AAS繋がりでも翻訳を担当することになった。

本書はほとんどが歴史の論考であるが、文学に関係するものとしては、クルスチアン・デ・ペー先生の「言葉による交通——唐宋時代中国における、都市空間と、テキスト地理学の変容」が挙げられるであろう。ペー先生は歴史学の専門家であるが、この論考は、思想、歴史、文学という枠組みを越えた研究で、むしろ文学研究の雰囲気をも有している。北宋の都開封についての都市記録である『東京夢華録』を扱っているが、冒頭、引用されるのがトルストイ『アンナ・カレーニナ』中の有名な内的独白のシーンである。19世紀後半のヨーロッパにおける都市の形成と文学の関係を、12世紀宋代の開封と文学の関係に結びつけた論考で、翻訳は難しかったが啓発される内容であった。ペー先生はオランダ出身で、米国コロンビア大学で博士号を取得し、現在はミシガン大学歴史学部にも所属している。

現在、日本の中国研究では欧米の研究者の研究成果を参照することが極めて少ないが、少なくとも英語圏では重要な研究が幾つも現れている。この翻訳を切っ掛けに、英語圏のシノロジーについて興味を持っていただければ幸いである。

越境する「中国語圏文学」 東亞現代中文文学国際学術研討会 (韓国ソウル)参加報告記

早稲田大学
小川 利康

2011年10月28,29日の2日間にわたり、韓国ソウルで「第9回東亞現代中文文学国際学術研討会」が開催された。台湾・香港・シンガポール・マレーシアから20余名の研究者が参加し、日本からも藤井省三教授(東京大学)、山口守教

授(日本大学)及び私が参加し、活発な議論が繰り広げられた。

今回の主題を紹介する前に、「東亞現代中文文学」という国際会議が誕生した由来に触れておきたい。この学会は藤井教授を中心とする科研プロジェクト「東アジアにおける魯迅『阿Q』像の系譜」のもとに集った内外の研究者で組織された国際会議「東アジアにおける魯迅研究」を嚆矢とする。爾来東アジア各地で開催され、第9回目を数えるに至った(上表)。論文集も順次刊行され、第8回シンポジウム論文集『跨海的東亞現代文学』(横浜号)が2011年12月に刊行された(非売品：希望者に頒布)。

第1回では、中国本土以外における魯迅研究の相互参照を企図していたが、第2回以降は広く東アジアにおける

回	開催時期	主催校/主題
1	1999年12月	東京大学 東亞的魯迅研究
2	2002年4月	シンガポール大学 中国現代文学研究的跨国与越境
3	2004年11月	韓国外語大学 東亞文化裡的台港文化与韓国
4	2005年11月	香港嶺南大学 東亞文化与中国文学
5	2006年10月	台湾清華大学 台湾文学与跨文化流動
6	2007年12月	中国汕頭大学 東亞文化与中国文学
7	2008年11月	シンガポール南洋理工大学 都市文学与社会変遷
8	2010年11月	日本大学、慶應義塾大学、東京大学 跨海的東亞現代文学文学 ¹
9	2011年10月	韓国ソウル大学・崇實大学 東亞的現代經驗与中国文学

「中文文学」(中国語圏文学)をキーコンセプトとして、東アジアにおける文化現象全般を研究対象とする場へと変貌している。藤井省三著『中国語圏文学史』(東京大学出版会)が中国本土の文学史だけでなく、香港・台湾文学も視野に収めるように、東アジアにおける中国現代文学の受容だけでなく、台湾文学にみる日本文学の影響、韓国における台湾・香港文化の受容など、従来見落とされてきた作品・作家を会議テーマとしており、国家地域の枠組みを越境する「中国語圏文学」の有りようを提示するものとなっており、視野狭窄に陥りがちな筆者は大いに啓発を受けている。

今回韓国ソウルで開催された会議は、会議初日をソウル大学で単独開催し、2日目は韓国中語中文学会(日本中国学会に相当する由)全国大会に属する分科会として開催するという形を取ったため、2日目は韓国人研究者の多数参加を得て、盛大な会となった。ここでは全国大会の紹介までは手が及ばず、また東亞現代中文文学学会に限っても、発表論文は合計19本もあり、その内訳も、中国大陸9本、香港4本、台湾4本、マレーシア1本、総論1本と多岐にわたるため、印象的かつ断片的感想にならざるを得ないがご寛恕を乞いたい。

初日の開会式では、開会の辞を全炯俊教授(ソウル大学、韓国中国現代文学学会会長)が、歓迎の辞を朴宰雨

¹ *第8回は慶應義塾大学を会場とし、三校共同で開催された。

教授(韓国外国語大学、韓国中語中文学会会長)が述べた後、王徳威教授(ハーバード大学)による特別講演「革命、啓蒙と抒情：現代中国文学的歴史命題」が行われた。このテーマは2010年刊行の著書『抒情伝統与中国現代性』(三聯書店)を敷衍した内容だったが、現代中国文学研究の泰斗の登場に会場は大いに沸き、発表後は王教授にサインを求める大学院生達が列をなしたほどであった。

休憩後に再開された第1部は「東亞の現代経験と対於文学、文化的新視野」と題して行われ、中国本土の文学に関連する発表が中心となった。まず第1セッションには山口守教授、陳智徳准教授(香港教育学院)が登壇した。山口教授の演題は「巴金と愛瑪・高德曼(Emma Goldman)―1920年代国民革命中の安那其主義」で、アムステルダム国際社会史研究所が所蔵する巴金とエマ・ゴールドマンとの間で交わされた貴重な書簡を仔細に分析したものであった。第2セッションは區仲桃准教授(香港教育学院)と筆者が登壇、筆者は「周作人と小品文―対「亡国之音」的的反駁」を発表した。時間をやや超過して午後三時近くに始まった第2部は「国民国家と(脱)植民主義的文学解説」と題して行われ、台湾・香港文学に関する発表が中心となった。崔末順准教授(台湾政治大学)「従後植民主義視角重新閲読頼和小説」は韓国人としての視点から日本統治下における台湾人作家を再評価するものであり、自らのアイデンティティと研究対象を係わらせて真摯に対峙する姿勢に感銘を受けた。また、呉佩珍准教授(台湾政治大学)「真杉静枝の自伝小説と『台湾』記号の反復―論『女兒』、『某個女性的生平』及其衍生文本」は台湾文学の文脈から日本語作品を読み解くもので、東アジアにおける近代文学の複雑な諸相を鮮やかに切り取るものであった。発表終了後、山口教授と張東天教授(韓国高麗大学)の司会で、陳芳明教授(台湾政治大学)、王潤華教授(台湾元智大学)が総括討論を行った。終日の討議で、一同疲労困憊の体だったが、夕食に供された参鶏湯とマッコリのお陰で元気を取り戻して二日目に臨んだ。

二日目はソウル大学宿舍からほど近い崇實大学へバスで移動して学会に参加した。韓国の全国学会全体の開会式とあって、韓国中語中文学会会長をつとめる朴教授の開会の辞もハングルで行われ、その内容は逐次中国語に通訳された。基調講演は王潤華教授(台湾元智大学)「如

影隨形的民族主義：現代中文文学与文化研究的典範与轉換」であった。続く分科会は藤井省三教授による「侯孝賢創造台湾百年史電影之時：『最好的時光(英訳名Three Times)』中的歴史記憶」から始まった。侯孝賢の近作『百年恋歌』を台湾歴史文脈と重ね合わせて論じるものであった。続いて陳国球教授(香港教育学院)による「台湾視野下の香港文学」は香港文学が台湾ではどのように読まれてきたのか、自身の文学体験との差異を踏まえて論じる。柳書琴教授(台湾清華大学)「滿洲内在化与島都書写：林煇焜『命運難違』的滿洲匪影及其潛輿論」は植民地化された滿州の文学作品が台湾でどのように受容され、書き換えられたかを論じるものであった。今回ホスト側に回った韓国研究者は発表が少なかったが、洪昔杓教授(梨花女大)が「現代中国「国学」研究的活躍与学問体系的重建」と題して近著の文学史で用いた基本理念を説明した。

二日目の閉会式は、次期役員の改選があるとのことで、部外者の我々は参加を辞退したが、懇親会は遠慮なく参加させていただき、韓国内外の研究者達と焼肉を楽しみ、焼酎を酌み交わし、楽しい一時を過ごした。遠来の闖入者を歓迎し、腹藏無く語り合って下さった韓国研究者にお礼申し上げたい。

今回の東亞現代中文文学学会は、一部日程を国内学会に取り込む形で行われたが、この試みは韓国でも余り例がない由で、一部はハングルと中国語が入り乱れ、困惑する場面もあったが、おおむね成功していた。今後は日本でも会議のテーマによっては積極的に中国語を公用語とし、国際的に開かれた会議にしてゆくべきであろう。



第2日目(崇實大学)開会式後の記念写真

国内学会消息 (平成二十三年)

●北海道中国哲學會

○例会

4月22日

・蘇洵の義利觀

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 加藤 眞司

5月27日

・韓国における中国哲學研究概況について—成均館大學
を中心— 張 維佳

6月24日

・桃源瑞仙の易學について

北海道大學大学院文學研究科准教授 近藤 浩之

8月4日

・《顔淵問於孔子》内事、内教二章校讀

武漢大學簡帛研究中心教授 陳 偉

10月28日(卒論構想發表會)

・『三国志』注における曹操像 中田まどか

12月22日

・三蘇の義利觀について

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 加藤 眞司

○研究發表大會

第四十一回研究發表大會竝總會

7月30日 於人文・社會科學總合教育研究棟W308

(研究發表)

・馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』における金石資料活用法

和田 敬典

・齊刀の釋文について

横濱市立大學准教授 小幡 敏行

・『孫子』用閒篇反閒論—『十一家注』と『閒書』を中心とし
て— 松島 愛

・賈似道について 陳 麗佳

・山鹿素行の「忠」思想について 張 捷

・江戸時代における『朱子家禮』の受容 吳 明熙

・山川九一郎著『九星農家要用記』について 猪野 毅

・駐米大使としての胡適の講演活動 猪野(胡)慧君
(近藤 浩之 記)

●北海道大學中國語・中國文學談話會

第230回 (1月29日)

・閻魔様からの告白——ただ、カボチャが缺けている

毛 文

・犬のイメージの變遷について 吳 秀娟

・天女から僵尸へ——早魁のイメージの變遷について

劉 傑宇

・清末妓女と上海都市空間

周 軍

第231回 (2月16日)

【卒業論文發表會】

・中國髑髏譚考—甦る髑髏— 久保田 歩

・六朝志怪中の蛇郎譚 長谷川奈月

第232回 (3月20日)

・皮五辣子(ピーウラーズ)——文化としての物語——

須藤 洋一

第233回 (9月28日)

・リルを探してくれないか——戦後日本の大衆文化にお
ける中國 齊藤 大紀

第234回 (11月23日)

【修士論文中間發表會】

・追い拂われる女神——早魁考 劉 傑宇

・小説『醋葫蘆』にみる喜劇性 望月 清香

・文芸作品に見る正徳帝像について——その戀愛故事を
中心に 高柳 美咲

・『點石齋畫報』の妓女の報道に関する研究 周 軍

第235回 (12月3日)

・古漢語與古詩欣賞 浙江大學 王 雲路

○刊行物

『饕餮』第19號(9月)

『火輪』第29號(3月)・第30號(9月)

(加部勇一郎 記)

●東北中国学会

第60回大会 5月28日・29日

第一日 於秋田大學

研究發表

・地域文化の鑛脈「秋田漢詩文」について

秋田大學名誉教授・新楚辭學文庫 石川三佐男

・唐「鴻臚井碑」の歴史的意義と内藤湖南

明治大學文學部 氣賀澤保規

公開講演(漢字文化振興會・中國文史哲研究會・秋田中國學
會共催)

・中国学研究の過去と未来

立命館大学教授・白川静記念東洋文字文化研究所所長
加地 伸行

第二日 於男鹿観光ホテル

研究発表

第一分科会(文学・哲学)

・『管子』の「聖人」について

東北大学大学院専門研究員 高田哲太郎

・詩律に対する唐代の意識について——試帖詩からのアプローチ——
東北大学大学院修了 薪塩 悠

・地理叙述よりみる「全相平話」と明代歴史小説の継承関係について——『新刊全相平話楽毅図斉七国春秋後集』『新刊全相平話前漢書統集』を中心に——

東北大学大学院 菅原 尚樹

・程瑤田の学問観について

東北大学大学院 尾崎順一郎

・中井竹山の儒者意識——その経学研究を中心として——
阿南工業高等専門学校 藤居 岳人

・「禹域の神明」——昭和三年、満州国建国に奔走した鄭孝胥と内藤湖南の漢詩の風景——

内藤湖南先生顕彰会会員 金澤 文三
(高戸 聡 記)

●秋田中国学会

○平成23年度春秋秋田中国学会第152回例会

5月28・29日

秋田大学60周年ホール等にて開催の第60回東北中国学会を兼ねて開催、本会関係者の発表は次の通り

・地域文化の鑛脈「秋田漢詩文」について 石川三佐男

・明代における二十四衙門及び王府の宦官の出自と異動に関する考察 進藤 尊信

○平成23年度秋季秋田中国学会第153回例会

11月26日 於秋田大学総合研究棟2階講義室

・哈爾濱・北京・安陽(殷墟)探訪の旅から 吉永慎二郎

・ギリシャ哲学から見た中国古代思想 山本 建郎
(吉永慎二郎 記)

●東北シナ学会例会

○2月例会 2月15日・16日

(卒業論文・修士論文発表会、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

(卒業論文発表会)

・「人虎伝」と「山月記」 中村 絵里

・『白楽天詩集』における武部利男訳についての一考察

吉田 有希

・『天主実義』における中西問答について 中島 彰宏

・戴震の思想——『孟子字義疏證』における欲と仁義禮——

佐藤 里奈

・中国語の名詞連接表現における「的」について——人を表す名詞の連接に注目して—— 中村 直矢

・台湾の翻訳漫画における中国語オノマトペの諸相——台湾版『ハチミツとクローバー』を資料として——

櫻井 彩

(修士論文発表会)

・漢代における『詩経』の継承について——韓嬰『韓詩外伝』における『詩経』の引用方法から——

高橋 良知

・詩律に対する唐代の意識について

薪塩 悠

・蘇軾・蘇轍における「道」について

渡邊 秀一

・伊藤仁斎の人間観について

宣 芝秀

○4月例会 5月14日

(新入生歓迎会)

・明朝嘉靖期の科挙と王門歐陽徳の学問 三浦 秀一
(高橋 睦美 記)

●東北大学中国哲学読書会

第167回中哲読書会 8月12日

(修士論文構想発表会)

・黄宗羲の思想——劉宗周理解から『明儒学案』編纂の立場へ—— 豊島ゆう子

・『悟真篇』とその注釈者翁葆光の思想 金子 由佳

第168回中哲読書会 9月30日

[卒業論文構想発表会]

・『荘子』における「存在」試論——「斉同」と「物化」を手掛かりに—— 今井 雅之

第169回中哲読書会 10月21日

(卒業論文構想発表会)

・『何心隠の思想』——講学思想を中心に——

小山 督理

(高橋 睦美 記)

●東北大学中国文学談話会

平成23年度 第1回中国文学談話会 8月6日

[卒業論文構想発表会]

・宋代詩人に見られる官韻とは異なる用韻に関する一考察——秦観の作品を通じて—— 加藤 明希

- ・『聊齋志異』の異類のキャラクター性 伊藤 亜有美
- ・『儒林外史』の結末についての考察—人物描写を通じて— 中福 絵美華
- ・茅盾『子夜』と横光利一『上海』の比較考察 福長 悠

平成23年度 第2回中国文学談話会 11月12日
〔卒業論文中間発表会〕

- ・秦観詩用韻考 加藤 明希
- ・『龍圖公案』と『律条公案』における類話の差異と構造に関する研究 堀川 慎吾
- ・『聊齋志異』の描く女性像の研究 伊藤 亜有美
- ・『儒林外史』研究—結末について— 中福 絵美華
- ・茅盾『子夜』と横光利一『上海』の比較を通してみる上海 福長 悠
(矢田 尚子 記)

● 筑波中国学会

○例会

6月16日(木)

- ・李白詩における「白鷺」について 逆瀬川 彰子

9月15日(木)

- ・『呂氏家塾読詩記』について——朱熹の詩説との関係を中心として 重野 安一

9月29日(木)

- ・陶淵明「読山海経」詩に於ける死の認識 加藤 文彬

11月17日(木)

- ・『聊齋志異』嬰寧考 高橋 恒輔

12月1日(木)

- ・「老将行」に見える陶淵明について 齋藤 聡

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第30号(10月)

(稀代麻也子 記)

● 中国文化学会

○大会

6月25日(土) 於聖徳大学

[研究発表]

- ・魚玄機試論—語り手の在り方と表現— 樋口 泰裕
文教大学
- ・十九世紀に出版された漳州系閩南語の英文資料について 村上 之伸
流通経済大学
- ・『史記』に現れる「説」 谷口 匡
京都教育大学

- ・李商隠詩における虚構の意味—悼亡詩「房中曲」をもとにして— 横浜国立大学 加固理一郎
- ・明治における文化の再編成と漢学、漢文 二松学舎大学 佐藤 一樹
- ・元代散曲と瀟湘(八景) 文教大学 舟部 淑子
- ・論語の分章—子張篇を中心に— 東京外国語大学名誉教授 高橋 均

[シンポジウム]

『老子』を高校・大学の教室でどう読むか

- コーディネーター 筑波大学附属高等学校 渡辺 雅之
- 発言者 土浦第一高等学校 清水 智恵
文教大学 渡邊 大

○例会

3月5日(土) 於大妻女子大学

- ・宴を“儀礼化”する—南朝梁・徐勉の「迎客曲」「送客曲」について 高崎経済大学 大村 和人
- ・漢代の太史と『漢著記』 千葉大学 内山 直樹

5月7日(土) 於大妻女子大学

- ・董其昌書論における生熟説について 筑波大学附属高等学校非常勤講師 尾川 明穂
- ・中国電影初到考—映画はいつ中国に伝わったのか— 文教大学 白井 啓介

12月10日(土) 於大妻女子大学

- ・中国古典文献に見る旋回儀礼の一端—元稹の「遶井」・李白の「遶牀」— (独)日本学術振興会特別研究員PD 山崎 藍
- ・イソップ物語と吉田松陰—幕末の対外認識について— 東京女子大学 安藤 信廣

○刊行物

『中国文化』第69号

(阿川 修三 記)

● 六朝学術学会

○例会

第23回研究例会 5月21日(土) 於二松学舎大学

[報告]

- ・正月十五日の行事について 青山学院大学大学院 富田 絵美
- ・「魏都賦」旧注に見える特徴について—「三都賦」劉逵注との比較を通して— 九州大学大学院 栗山 雅央
- ・遠望と遐想—六朝文学の主題として— 東京大学 齋藤 希史

○大会

第15回大会 11月5日(土) 於二松学舎大学

[報告]

- ・ 阮籍「詠懐詩」に描かれる命
お茶の水女子大学大学院 鄭 月超
- ・ 陶淵明「讀山海経」詩の連作的構造—超越と回帰—
筑波大学大学院 加藤 文彬
- ・ 陶淵明「孟府君伝」に関する考察—「君」に着目して—
明治薬科大学非常勤講師 大立智砂子
- ・ 六朝の総集における先秦兩漢の「作品」について
奈良女子大学 谷口 洋

[記念講演]

- ・ 西涼楽の形成と展開 京都府立大学 渡辺信一郎

○刊行物

『六朝学術学会報』第12集(3月末日)

(大村 和人 記)

● 日本聞一多学会

◆大会

日本聞一多学会第15回大会

6月25日(土)14時~17時

於近畿大学本部キャンパス文芸学部2階第一会議室

- ・ 初唐の七言歌行——聞一多に導かれて
京都大学 川合 康三
- ・ 中国現代文学における古典復讐譚のリメイク
九州産業大学 呉 紅華

◆刊行物

『神話と詩』第10号(12月)

(野村 英登 記)

● 国士館大学漢学会

○第46回大会(10月7日)

(学生発表)

- ・ 3年次生卒論中間発表
- ・ 山西大学学術交流セミナー報告
原 良枝・中玉利誠一・河野 幸彦
山田 愛・長島勇太朗・江刺家康二

(特別講演)

- ・ 「私のこれまでとこれから」
国士館大学非常勤講師 中村 俊也

○刊行物

『國士館大學漢學紀要』第13号

(鷲野 正明 記)

● 日本漢文小説研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

5月29日

- ・ 小泉八雲の再話と『夜窓鬼談』 林 淑丹

7月17日

- ・ 森槐南『補春天伝奇』について 荒井 禮

10月16日

- ・ 『狂詩文歌句 幼学便覧』について 荒井 禮

12月18日

- ・ 近代日本における日本漢文小説研究—石崎又造を例として— 川邊 雄大

- ・ 『譯準綺語』について 荒井 禮

(鷲野 正明 記)

● 明清文人研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

4月29日(祝・金)午後15時~17時

- ・ 中国美術学院出版社『唐白虎全集』附録「年表」読解
筑波大学大学院 荒井 礼

6月5日(日)午後13時~15時

- ・ 中国美術学院出版社『唐白虎全集』附録「年表」読解
筑波大学大学院 荒井 礼

9月18日(日)午後15時~17時

- ・ 中国美術学院出版社『唐白虎全集』附録「年表」読解
- ・ 唐白虎「和沈石田落花詩三十首」について

筑波大学大学院 荒井 礼

11月27日(日)午後15時~17時

- ・ 中国美術学院出版社『唐白虎全集』附録「年表」読解
筑波大学大学院 荒井 礼

(河内 利治 記)

● 宋詞研究会

○『唐宋名家詞選』譯注検討會

9月10日(土)、11日(日) 於中京大學文化科學研究所

- ・ 龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

1月22日(土)至11月26日(土)

於立命館大學文學部中國文學專攻共同研究室

- ・ 龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○刊行物

『風絮』第七號(3月)

(萩原 正樹 記)

● 宋代詩文研究会

一、『橄欖』第18号の刊行

二、第15回宋代文学研究談話会の開催(宋詞研究会と共催)

5月28日 於同志社大学

①【中国留学生によるミニ・シンポ「宋詩と日本漢詩」】

・市河寛齋のもう一つの『陸游年譜』

名古屋大学大学院 金 明蘭

・大窪詩佛の詠物詩について

早稲田大学大学院 張 洵

・「暗香」考

創価大学大学院 韓 雯

②蘇軾「江神子(密州出獵)」詞の受容及び評價の變遷について

京都外大西高等学校 池田 智幸

③歐陽修与朝鮮漢文学—以《廬山高》、《醉翁亭記》在朝鮮的流伝為例—

南京大学 卞 東波

④祭祀與觀看—論北宋後期尊崇陶淵明的熱潮—

上海財經大学 李 貴

⑤王禹偁「答張扶書」をめぐって

同志社大学 副島 一郎

⑥高似孫學術的時代特色

北京大学 顧 歆藝

⑦張炎『詞源』卷上「陽律陰呂合声図」考—その二重循環の意味するもの—

中京大学 明木 茂夫

⑧楊万里と「詩債」

大阪大学 浅見 洋二

三、第1回南宋江湖詩派國際シンポジウム「江湖派研究のパースペクティブ」の開催(学振科研費課題グループとの共催)

12月26日 於大阪大学

①南宋江湖詩人の位相と研究の可能性

早稲田大学 内山 精也

②江湖詩人と晋宋風致—姜夔的生活模式与詩歌風格—

香港浸会大学 張 宏生

③閑適唱酬、組詩形態与劉克莊晚年詩歌創作的主流—從幾組“效後村体”談起—

復旦大学 侯 体健

④從元明“晚宋”觀看江湖派的歷史境遇

復旦大学 陳 広宏

⑤江湖詩派与『三体詩』流行之關係考

復旦大学 查 屏球

⑥日本五山における『三体詩』の受容

慶應義塾大学 堀川 貴司

四、例会 8、9、2、3月を除く毎月

戴復古五律讀書会

(内山 精也 記)

● 中唐文学会

第22回大会 10月7日

於九州大学箱崎キャンパス

[研究発表]

・唐詩に見える夏の諸相—冷涼感を中心として

早稲田大学 高芝 麻子

・友を待つ詩人—唐代園林における詩人の交遊を中心—

琉球大学 紺野 達也

・白居易及“長慶体”詩的明代接受文献輯考

吉林大学 沈 文凡

(中尾健一郎 記)

● 名古屋大学中国哲学研究会

○研究会

第60回研究会(3月10日)

[研究発表]

・アメリカにおける中国哲学教育・研究実態の紹介

キング・ロバート

第61回研究会(4月27日)

[研究発表]

・後漢時期的妖巫・妖賊與太平道政治性格の形成

胡 常春

第62回研究会(7月5日)

[『名古屋大学中国哲学研究論集』第10号合評会]

・胡常春著「魂瓶“持節仙人”考」

張 名揚

第63回研究会(10月31日)

[修士学位論文中間発表]

・『山海経』に見える風雨の神

石川 明大

・『論語古訓外伝』に見える太宰春台の聖人観

今井 美咲

第64回研究会(12月16日)

・善導『般舟讚』に示す信の喜悦

近藤 法雄

○講演会

11月28日

(名古屋大学大学院文学研究科オープンセミナー)

・『太上靈寶五符序』裡的傳説

北京大学教授 王 宗昱

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第10号(5月25日)

(小崎 智則 記)

● 京都大学中国文学会

○第26回例会

7月23日 於京都大学百周年時計台記念館

- ・周作人のリチュアリズム 京都大学 福嶋 亮大
- ・蛙の意象について 京都女子大学 愛甲 弘志
- ・漢代における演劇の可能性 龍谷大学 小南 一郎

○刊行物

『中国文学報』第80冊(4月)・第81冊(10月)
(成田健太郎 記)

● 中國藝文研究會

○合評會及び研究會

3月20日(日)合評會・研究會

於立命館大學中國文學專攻共同研究室

『學林』第52號合評

- ・四庫全書原本『廣韻』の底本 董 偉華
- ・明代短篇白話小説「范知縣羅衫再合」について～明代を描くこと～ 廣澤 裕介
- ・晋唐書風及び和様書道——粘葉本『和漢朗詠集』を中心に
にして 辛 文
- ・巖谷小波と森川竹篔 萩原 正樹

4月24日(日)研究會 於立命館大學國際平和ミュージアム
アカデミア立命21 會議室

- ・建安詩壇形成の一場面 篠原 健二
- ・唐代文学における胡人について 井上枝里子
- ・薛濤とその詩の魅力について 劉 暢
- ・三つのテキストにおける太公望像の比較 渡部 玄太
- ・沈從文と自殺概念の関連性 和泉 遼
- ・柳宗元作品の研究—柳州時代を中心として—
路 璐

・『采菽堂古詩選』編纂と七子派批判との関係性
鈴木 俊哉

7月24日(日)研究會 於立命館大學國際平和ミュージアム
アカデミア立命21 會議室

- ・甲骨文の誕生 原論 高島 敏夫
- ・『選詩演義』攷異—『選詩演義』の『文選』版本上の問題—
芳村 弘道
- ・森川竹篔年譜稿 萩原 正樹
- ・中村不折旧藏「月令」残巻について 金 程宇

9月25日(日)研究會 於立命館大學國際平和ミュージアム
アカデミア立命21 會議室

- ・『采菽堂古詩選』における七子派批判 鈴木 俊哉

- ・白夫人と青青 ——一つの白蛇傳變遷史— 谷口 義介
- 刊行物
- 『學林』第53・54號(松本幸男先生・島一先生追悼記念論集)
(12月) (鈴木 俊哉 記)

● 東山之會

○研究發表 於京都女子大學

2月19日

- ・曹植評価の問題について 王 宜瑗

3月26日

- ・最近の元稹の研究について 姜 若冰

6月18日

- ・靖節祠—北宋後期的陶淵明崇拜— 李 貴

7月30日

- ・秋成と蘇軾 李 婷

9月24日

- ・韓愈詩歌明代接受文獻初輯 沈 文凡

10月24日

- ・詩詞註釋本に見える共通性 藤原 祐子

11月26日

- ・賈島「苦吟」の實相について 中木 愛

12月17日

- ・中國文學における幼年期の追憶 淺見 洋二

○『杼山集』及び『長江集』譯註(2月19日至12月17日)

『杼山集』卷二「五言苕溪草堂自大曆三年……四十三韻」至
「五言酬薛員外誼見戲一首」。『長江集』卷一「古意」至「寄遠」
(愛甲 弘志 記)

● 阪神中哲談話会

第390回例会 3月26日 於茨木市福祉文化会館

- ・春秋左氏伝の書法と左氏経文の作経メカニズムについて
吉永慎二郎

・神楽岡昌俊先生を偲ぶ会

第391回例会 6月25日 於茨木市福祉文化会館

- ・『紅樓夢』に見られる『莊子』の世界—第二十一回、第二十二回、第六十三回 王 竹
- ・古代中国における五則と五行 渡邊 賢一

第392回例会 9月24日 於茨木市福祉文化会館

- ・唐宋期の「内丹」觀念について—『雲笈七籤』「内丹(部)」
を手がかりに— 畑 忍

第393回例会 11月26日 於茨木市福祉文化会館

- ・台湾道教の転水蔵科儀とその文書 山田 明広
(橋本 昭典 記)

● 大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

○刊行物

『中国研究集刊』第五十三号〔崑号〕(清華簡小特集を含む)
(二〇一一年六月)刊行。

(湯浅 邦弘 記)

● 中国出土文献研究会

(平成22年10月より、戦国楚簡研究会を改称)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

○国内研究会合

第44回研究会

平成23年7月17日

於新宿ワシントンホテル新館会議室

- ・『上海博物館蔵戦国楚竹書』第八分冊の积読分担について
- ・清華簡第二分冊の研究について
- ・浙江大学・上海博物館の訪問について
- ・「清華簡『保訓』の文字学的検討」 福田 哲之
- ・「清華簡『保訓』积読」 草野 友子

第45回研究会

平成23年10月9日～10日

於博多第一ホテル会議室

- ・上海博物館蔵戦国楚竹書実見調査報告 草野 友子
- ・浙江大学蔵戦国楚簡について 湯浅 邦弘
- ・清華簡『尹至』の文献的性格 福田 哲之
- ・清華簡『保訓』における「中」について 草野 友子
- ・清華簡『程寤』について 湯浅 邦弘
- ・清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』の文献的特質 金城 未来
- ・清華簡『皇門』における周公旦 福田 一也
- ・清華簡『祭公之顧命』の文献的性格 草野 友子

第46回研究会

平成23年12月11日

於貸会議室フォーラムミカサ(東京)

- ・上博楚簡『成王既邦』について 金城 未来
- ・上博楚簡『有皇将起』积文 福田 一也
- ・上博楚簡『李頌』积読 竹田 健二
- ・上博楚簡『蘭賦』积読 竹田 健二
- ・上博(八)『子道餓』 福田 哲之

- ・台湾大学開催の「出土文献研究方法国際學術研討會」について 湯浅 邦弘

第47回研究会

平成24年1月21日～22日

於大阪大学中国哲学資料室

- ・上博楚簡『顔淵問於孔子』と儒家系文献形成史

湯浅 邦弘

- ・上博楚簡『命』积読 草野友子〔金城未来代読〕
- ・上博楚簡『李頌』の文献的性格 竹田 健二
- ・上博楚簡『有皇将起』积文(附現代語訳) 福田 一也
- ・上博楚簡『成王既邦』における「天子之正道」について

金城 未来

○国際学術交流

平成23年5月7日～9日

中国湖北省武漢の華中師範大学において開催された「東アジア文化交渉学会」に、湯浅邦弘・竹田健二・草野友子・金城未来が出席、研究発表を行った。また同期間中に、荆州市出土の戦国楚墓「熊家冢」を視察した。

- ・「清華大学蔵戦国竹簡『耆夜』初探」 竹田 健二
- ・「清華大学蔵戦国竹簡『祭公之顧命』初探」 草野 友子
- ・「清華大学蔵戦国竹簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』初探」 金城 未来
- ・「銀雀山漢墓竹簡『起師』之兵学思想」 湯浅 邦弘

平成23年5月10日

武漢大学簡帛中心において湯浅邦弘・竹田健二が講演し、陳偉教授をはじめとする簡帛中心の研究者と会談した。

- ・「太姒之夢與文王訓誡—清華簡『程寤』考—」

湯浅 邦弘

- ・「清華大学蔵戦国竹簡『耆夜』初探」 竹田 健二
- 詳しくは以下を参照

http://www.bsm.org.cn/show_news.php?id=345

http://www.bsm.org.cn/show_news.php?id=346

平成23年6月28日～29日

北京の清華大学出土文献研究與保護中心で「『清華大学蔵戦国竹簡(一)』国際学術研討會」が開催され、浅野裕一が参加して「清華簡『楚居』初探」と題する研究発表を行った。

平成23年8月31日～9月4日

上海博物館を訪問して、上海博物館蔵戦国楚竹書(上博楚簡『恆先』『曹沫之陳』『競建内之』『鮑叔牙与濕朋之諫』『鄭子家喪』『君人者何必安哉』)を実見し、また、浙江大学を訪問して、同大学所蔵戦国楚簡について曹錦炎教授の説明を受け、会談した。

平成23年11月26日～27日

台湾大学で開催された「出土文献研究方法国際學術研討會」に湯浅邦弘が出席し、「上博楚簡《顔淵問於孔子》與儒家系統文献形成史」と題する研究発表を行うとともに、「綜合討論出土文献研究方法：文字、文献、思想」のコメントーターを務めた。

(湯浅 邦弘 記)

● 中国中世文学会

○平成23年度研究大会

10月22日 於広島大学文学研究科

[研究発表]

・鮑照「東門行」の心情表現—「思い」の具象化—

小西 美代

・鮑照「蕪城賦」小考

佐藤 大志

・庾信の詩—「清新」について(一)—

森野 繁夫

・六朝の行旅詩—旅夜について—

佐伯 雅宣

・後漢の墓券と六朝小説の冥界

許 飛

・清代天津詩壇における杭州詩人

市瀬 信子

・『唐訳便覧』の読者層

武内 真弓

○例会

*1月27日

・熹平二年(173)張叔敬の鎮墓文

許 飛

*2月24日

・韓愈の元和五、六年の墓誌銘について

渡辺志津夫

○刊行物

『中国中世文学研究』第59号(9月)

(富永 一登 記)

● 広島大学中国文学研究室研究会

第162回 1月28日

(修士論文最終発表)

・簡文帝蕭綱の文学とその人となり

馬 里

第163回 2月14日

(卒業論文最終発表会)

・中国語方向表現の研究

村山 沙織

第164回 5月23日

・鮑照詩歌の表現法—思いの具象化—

小西 美代

・『唐話類纂』の語彙からみる唐話学習者の意識

武内 真弓

第165回 6月27日

(修士論文最終発表)

・広東客家山歌における人称表現—清・劉建楷『程楷七山

歌』を中心に—

呂 詩詠

・『宇治拾遺物語』の怪異説話と中国古小説との比較研究

劉 暢

(修士論文構想発表)

・「正史」の中の「心肝」について

小山佐和子

第166回 7月29日

(卒業論文中間発表会I)

・『四體書勢』における文章表現

志田 乙絵

・唐代伝奇における別世界—「補江総白猿伝」を中心として

小野村奈苗

・梅堯臣のものの描き方について

大井 さき

第167回 11月25日

・「補江総白猿伝」における異世界の描写について

小野村奈苗

・梅堯臣詩研究—虫の詩について—

大井 さき

第168回 12月16日

(修士論文構想発表)

・六朝志怪小説における異人について

本間 貴博

○刊行物

『中国学研究論集』第26号(4月)

(富永 一登 記)

● 山口中国学会大会

6月18日(土)午後1時半～

於人文学部第2講義室

[研究発表]

・「台湾総督府国語学校と言語教育の研究」

王 秋陽

12月17日(土)午後1時半～

於人文学部第2講義室

[研究発表]

・「漢語に入ったアラビア語及びペルシャ語単語の音形について」

更科 慎一

・「山東の宣講書『宣講宝銘』残巻について」

阿部 泰記

(根ヶ山 徹 記)

● 第57回中国四国地区中国学会大会

5月28日(土) 開催校：高知大学

会場：高知大学朝倉キャンパス人文学部5F第1会議室

研究発表(午前の部)

・名実一致あるいは正名の観点から古典を読む試み

溝本 章治

司会：徳島大学 有馬 卓也

- ・鮑照詩歌の表現法—思いの具象化—
 広島大学大学院 小西 美代
 司会：高知大学 中森 健二
- ・六朝志怪小説「再生説話」に見られる死の過程—「境界性」仮説を参考として—

広島大学大学院 中村 友香
 司会：高知県立大学 高西 成介

研究発表(午後の部)

- ・敦煌本「讚嘆文」の実践と発展変化—唱導、俗講、変文との関わりを中心として—

広島大学大学院 徐 銘
 司会：山口大学 阿部 泰記

- ・道真詩における「月」の見立て

岡山大学大学院 潘 怡
 司会：愛媛大学 太田 亨

- ・『唐話類纂』の語彙からみる唐話学習者の意識

広島大学大学院 武内 真弓
 司会：愛媛大学 太田 亨

- ・「気」としての「鬼神(キシン)」論—江戸儒家神道を考察する前提として—

広島大学大学院 韋 佳
 司会：高知大学 玉木 尚之

講演

- ・清末・変法派人士が山本憲に宛てた手紙

高知大学 吉尾 寛
 司会：高知大学 高橋 俊
 (玉木 尚之 記)

● 第七十一回香川中国学会

2月11日 於香川大学教育学部第四会議室

- 一、梅攷—中国古代中世を中心—to 亀井 美希
- 二、鳳凰攷 松添 麻美
 (間嶋 潤一 記)

● 九州中国学会

平成23年度(第59回)九州中国学会大会

5月14、15日 於鹿児島大学

5月14日

- ・中国・長春市に現存する満洲国国都建設期の主要「近代建築」の利用について 矢羽田朋子
- ・黄百家の思想—『宋元学案』を中心として—
 連 凡
- ・元雜劇における定型句「看有甚麼人来」について
 戚 世雋

- ・寒山伝説の変遷 鄭 文全
 - ・入門期の中国語教育において発音再現ほどの程度正確であることを要求すべきか 野田 雄史
 - ・周必大原刻本『歐陽文忠公集』について 東 英寿
- 5月15日

- ・中国の新疆ウイグル自治区におけるウイグル人の言語使用意識と言語使用状況—コルラ市の事例を中心に—

アイネル・バラティ

- ・「滑稽」としての莊周 榎崎洋一郎
- ・中国における『レ・ミゼラブル』受容の一側面—陳景韓訳「逸犯」と秋瑾事件の関連を中心に— 梁 艶
- ・千載佳句所収唐詩句の来源について 静永 健
- ・清明上河図と北宋の芸術論 高津 孝

○刊行物

『九州中国学会報』第49巻(2011年5月)

(中里見 敬 記)

● 九州大学中国文学会

○中国文藝座談会

第251回 2月5日

- ・曲水の宴と詩歌 新谷 香織
- ・林黛玉論 古賀 文也
- ・日本雜事詩に見える黄遵憲と日本 西村 紗理
- ・中国から見た「桜」—中国人留学生たちの詩を迎へ—
 本田 悠

- ・広州嶺南大学における日中文学交流—劉思慕と草野心平を中心に— 裴 亮

・元雜劇中の程式化用語「看有甚麼人来」 戚 世雋
 第252回 3月5日

- ・狐と悪女—『封神演義』の妲己を中心に— 神代さおり
- ・北京の宮殿群と文学 今村 彩乃
- ・近代女性作家梅娘と日本 深町 麻未
- ・『魚』に現れる梅娘の女性観 松岡千絵莉
- ・寒山双重像形成縁起考 鄭 文全
- ・明・胡応麟における『搜神記』輯佚過程 雁木 誠

第253回 4月23日

- ・辞賦から見る三国志 栗山 雅央
 - ・則天武后と唐都長安 種村由季子
 - ・江戸時代における明樂受容の諸問題 中尾友香梨
- 第254回 7月30日

- ・元稹「連昌宮詞」の新意 長谷川真史
- ・明・呉嘉謨『孔聖家語図』と明代出版業の発展隆盛 楊 文歆

- ・ 欧陽脩の書簡九十六篇の新発見について 東 英寿
- ・ 九大漢籍蒐集史——狩野亨吉からの図書購入

大淵 貴之・山根 泰志

第255回 9月17日

- ・ 駱賓王「帝京篇」の創作意図について 種村由季子
- ・ 二〇卷本『搜神記』と胡応麟 雁木 誠
- ・ 日本伝存「長恨歌序」の再検討 陳 翀
- ・ 寒山詩と江戸文人たち 鄭 文全

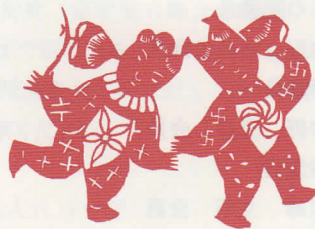
第256回 11月12日

- ・ 蕉園諸子と西泠文士 李 恬
- ・ 詩人の旅——杜甫の入蜀と陸游の入蜀 甲斐 雄一

○刊行物

『中国文学論集』第40号(12月)

(奥野新太郎 記)



❖ 委員会報告

選挙管理委員会

委員長 土田健次郎

1, 評議員の一部交替

平成24年3月31日をもって評議員1名が役員定年(顧問を除く)となり(日本中国学会会則)第13条第3項、第4項)、同じく評議員1名が退会したので、平成22年に実施された評議員選挙の結果に基づき、新たに2名の会員が平成24年4月1日付けで評議員に繰り上げ当選となった。後任の評議員の任期は平成25年3月31日までの1年となる。

○役員定年の評議員

池田 知久 会員

後任の評議員

宇野 茂彦 会員

○退会の評議員

尾崎 文昭 会員

後任の評議員

浅野 裕一 会員

なお池田知久会員は平成24年度4月1日付けで顧問に就任した。(2011年10月7日開催の評議員会で決定。『学会便り』2011年第2号)。

2, 平成25・26年度役員選挙

前の便り(2011年第2号)で報告したように、本年(2012年)、平成25・26年度の役員選挙を行う。5月末に予定されている評議員選挙投票用紙発送(投票締切は6月中旬すぎの予定)から順次始まるので、会員の注意を喚起しておきたい。

出版委員会

委員長 竹村 則行

「日本中国学会便り」の編集担当について、2010年第2号より京都大学文学部中国語学中国文学研究室(代表平田昌司会員)が担当してきましたが、次号2012年第2号(通巻第22号)より九州大学文学部中国文学研究室(代表竹村則行会員)に交代します。

どうかご協力よろしく申し上げます。連絡先は下記のとおりです。

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

九州大学文学部中国文学研究室

竹村 則行

e-mail: nihonchugoku.tayori@gmail.com

(このメールアドレスは、「便り」編集担当用として新設しました。)



❖ 事務局より

◎住所変更と名簿への掲載について

住所・所属機関等の変更は、速やかに事務局までご通知ください。通知は、メール・書面もしくはファックス、振替用紙通信欄にてお願いします。

10月発行の会員名簿には、8月末までにお知らせいただいた会員情報を掲載させていただきます。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。

◎寄付金について

第63回大会準備会(代表：九州大学・柴田篤会員)より学会に対し、「大会無事終了の感謝の気持ちを表すため」として金5万円のご寄付を頂戴しました。ここに広く会員の皆さまにお知らせするとともに、柴田会員をはじめ関係各位に改めてお礼申し上げます。

訃報

昨年度『学会便り』第2号発行以降、以下の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

栗原 圭介 (関東地区) 2012年1月26日

牧田 諦亮 (近畿地区) 2011年8月8日

◎新入会員の紹介について

学会への入会は、通常会員または国外会員1名の紹介により、定例理事会(年2回、5月と10月に開催)において審議・決定し、評議員会において承認された後、初年度の会費納入を以て、会員資格が発効します。

入会資格は、文学・語学、哲学・思想他、中国に関連する諸領域の教育・研究に従事する者、またこれらの領域を専攻した大学等の卒業生となっています。

入会申し込みは、日本中国学会HPにある書式をプリントアウトの上、学会事務局宛(〒113-0034 文京区湯島1-4-25 斯文会館内)にご郵送ください。本年度10月分は10月1日(月) 必着でお願いします。

毎年多くの住所不明者が発生しております。入会后、転居・所属変更(留学生の場合は帰国)の際には速やかに事務局まで届け出るよう助言の労をお取りください。ご紹介者に照会させていただくこともございますので、その旨ご了承ください。

◎会費の納入について

会費が未納となっている方は、至急送金願います。2ヵ年にわたって会費が未納となりますと、『学会報』が付されません。さらに4年間滞納の会員は除名になりますので、ご注意ください。

(郵便振替口座：00160-9-89927)



日本中国学会事務局

〒113-0034

東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館

FAX：03-3251-4853

E-mail：info@nippon-chugoku-gakkai.org

※2011年4月からメールアドレスが変更になりました。

第64回大会開催のお知らせと研究発表募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第64回大会は大阪市立大学が準備を担当し、本年10月6日(土)、7日(日)の両日に大阪市立大学杉本キャンパスで開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集致しますので、奮ってご応募下さいますようお願い申し上げます。

2012年4月吉日

日本中国学会第64回大会準備会代表 齋藤 茂

記

部会 一、哲学・思想 二、文学・語学
三、日本漢文(日本漢学・和漢比較文学・漢文教育など)

時間 発表20分 質疑応答10分

締切 6月30日(土)(消印有効)

【郵送宛先】

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3丁目3-138

大阪市立大学文学研究科中国語中国文学教室内

日本中国学会第64回大会準備会事務局

齋藤茂宛

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文の三部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。

◎発表は、学術研究の最新の成果で、未公開のものに限ります。発表ご希望の方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、印字した発表題目および概要(800字以内、併せてテキスト形式の電子ファイルを添付)を、締切日までに大会準備会宛にお送りください。なお執筆者による校正はありませんので、完全原稿をお願いします。

また、応募者多数の場合は、やむを得ずご発表をお断りすることもございますので、ご了承ください。

【問合せ先】

e-mail : nittyuu_gakkai2012@yahoo.co.jp

(uとgのあいだの_は、アンダーバーです。)

Tel : 06-6605-2420(齋藤)

06-6605-3054(大岩本)

Fax : 06-6605-2357(齋藤宛であることを明記)

